
dangerous game ~ **ジキア**side story ~

露露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dangerous game ～ジキアside story～

【コード】

N8590G

【作者名】

露露

【あらすじ】

ジキアの番外編。幼き少年たちのほのぼの話。

やわらかい陽光の中、両手をひろげた。

気持ちのよい風を全身に感じる。

自然界の障害物をもともせず全力で駆け抜けるそれは、半ば本気のおごごご。

「まあ〜てえ〜!!！」

「いやだあつ」

オニは五秒後に追跡を開始する。脚力はほぼ同じ。全力だから距離は全く縮まらなかった。勝負はつかない。このままならば。

『ばくっ』

「わっ」

どんつと足元の地面が少し抉^{えぐ}れる。が、俊敏に避ける。

『ばくばくばくっ』

「わわわつとと」

魔術の連打は的確ではなかった。体を掠^{かす}めて全て前方の木々に当たる。どどどんつと爆発音。

「どこ狙ってんのっ」

「へへっ」

次の瞬間、目の前に破壊された木々が勢い良く倒れてくる。

「しまった!！」

「足止めだつ!かくごしろっ!！」

どおおんつ、と倒れた木々を避けるように、二人同時飛んでいた。空中での距離は体一つ分。

「つかまえ」

両手をひろげたオニを振り返った逃亡者が光る右手を突き出す。

「いやだ」

「ひ」

『つてっ!』

語尾が呪文となりエネルギーが放出された。魔術は瞬時に張られたシルドの端を掠め勢い良く森に落ち爆発する。

「こえええじゃんっおまえっ！」

オニがちよつと顔を青くしながら言いつつも掴まえようと手を伸ばすが、避けられ、宙を切る。

「だつて捕まりそうだったからっ！」

必死に掴まえようとあちこちに伸ばしてくるオニの手を全て綺麗に避けながら逃亡者は半泣きの顔を浮かべていた。

「大人しくつかまれっ！」

「いやだつて言ってるじゃんっ！」

下降しながらびゅんびゅんと攻防を繰り返し、地面に叩き付けられる寸前、二人は同時に片手を地面に向け、

『炸っ』『えいっ』

と、それぞれ軽く術を打つ。反動で少し跳ね上がり、上手く着地した二人は又同時に駆け出した。

「くそおっ！逃がすかあっ！」

「つかまるもんかあっ！」

時間は刻々と過ぎ、疲れを知らないおにごっこはひたすら続く。気付けば辺りはオレンジ色に染まっていた。

二人は走り回るうちに見失った帰り道を発見し、ほっとしたように一気にペースが上がる。

距離は依然として体一つ分。

「よしっ！しようぶだっ！」

「うっうっ！」

オニが術剣を手に握った。ほぼ同時に逃亡者も術剣を手にする。がきいいいん、と一交わりひとまじしたのをきっかけに、二人は横並びに走って攻防を繰り返した。

「うりゃあ〜っ！」

「くっくっ！」

オニの足元の攻撃を飛んで避ける。その僅わずかな停滞を待っていた

のかオニは、

「炸！」

とすかさず魔術攻撃。

「ぎゃあ！ずるい！」

思わず叫び声を上げたがなんとか術剣で防御。しかし、またその隙を狙ってオニが懐へ飛び込んできていた。

歯を食い縛った逃亡者は必死に術剣を頭上へ振り上げ防御。ガキイン、と高らかに金属音が鳴り響く。

「ちくしょー」

「うづうーっもう、おこったっ！」

そう言っって目を吊り上げた逃亡者はガキインと力の限りオニを跳ね返していた。

そしてすでに術剣の消失した両手に宿る光を目にしてオニは青ざめる。

「やべ、やりすぎた……………」

「滅ッ ……！！！」

オニの呟きはすぐさま魔術の轟音こうおんに掻き消されていた。

予想もしない巨大なエネルギーの放出にオニは全力で防御体制を取り、閃光せんこうに目を閉じる。

加減を忘れられた魔術の塊りは、それでもオニを数メートル先へと吹き飛ばした。

ずざざざざーっど地を滑り、気を失いかけていたオニはふと、柔らかな感覚に身をつつまれる。

「……………はれ？」

地上から僅か数センチの所に体が浮いていたかと思うと、ゆっくりに地に体が付く。柔らかな感覚もすぐに消える。

「……………うづう……………」

掠れた声で唸りうな、オニはふらふらと体を起こした。所々流血もしているようだった。

しかしその痛みを越える痛みが、がつんとオニの頭部へ落下す

る。

「だあつ！」

驚いて目を丸くしたオニの目の前に般若のような母の顔。

さつと血の気が引いた。

「あー、えーと、その、あの、た、た、ただいま”！」

可愛く笑ってみたオニに返ってきたのはさらなる鉄拳であった。

「うう………ゴメンナサイ………」

頭を抱えつつ謝罪するが、母はまだ目を吊り上げたまま怒声を放つ。

「ほんつともうあんたたちは！何やつとんじゃ！」

「何つて………おにごっこだよ………」

がつん！

再度殴られ涙目で抗議の視線を向けると、母はオニの首根っこをひつつかんで真後ろを向けさせ、

「家破壊するのがおにごっこじゃないでしょーが！」

上半分がなくなった我が家を目にし、はははと乾いた笑いを洩らすオニ役のアッシュなのだつた。

* * *

リシュデイルの放った魔術はアッシュ毎吹き飛ばしつつも、シールドに弾かれすぐ背後に迫っていた我が家に激突したらしい。

室内にいた父が咄嗟とつとに全壊を回避させ、庭にいた母が地を転がってくるアッシュを守った。

意識の飛んでいたリシュデイルは父によって連れ帰られるとすぐに目を開け、アッシュ同様母のげんこつを食らって、今は二人仲良く夜空の下で罰を受けている。

水の入ったバケツを頭にのっけて、もうすぐ一時間が経つだろう

か。

ぐう、と、二人のお腹が鳴った。

「おなかすいたね……」

「おまえのせいだぞ、デイル」

「……だって、アッシュがずるいことするからだもん……」

……」

「どこが？魔術おにごっこは何でもアリだろー？」

「でも剣つかうときは魔術なしって言ったのアッシュじゃん」

「そんなこと言ってない」

「言ったもん。ぼくちゃんと覚えてるからね」

「言ってない！」

「言った！」

「ぜったい言ってない！」

「ぜったい言った！」

「言ってない言ってない言ってない！」

「言った言った言った！」

アッシュとリシュデイルはお互い睨み合ったまま、そっと頭の上

のバケツを地面に置いた。

今日は魔術道具での見張りもない。

「しょうぶのつづきだ！」

「のぞむところ！」

二人は勢い良く掴みかかった。庭の地面に転がる。

魔術はなし。術剣もなし。素手での取っ組み合い。

しかし、どれだけ殴り合ってもお互いに一発も当たらなかった。

何もかもが一緒に、やはり勝負はつかない。

そうしてまた結構な時間が経っていた。

「はあ、はあ、このやるお」

アッシュのへろへろとしたパンチを、同じくらい荒い呼吸のデイル

ルがのそりとかわし、とうとう二人は力尽きた。

折り重なっていた体を放し、仰向けに寝転がる。

「はあ、はあ、う〜…………おぼえてるお〜」

「はあ、はあ、そっち…………こそお〜」

お互い強がることは忘れずそう吐き捨て、暫く目を閉じると、静かに呼吸を整える。

もう一度目を開けたとき、二人は真上に広がる無数の星に気付く、小さく歓声を上げた。星の瞬またたく音までも聞こえてきそうな星空。

「きれーだな！」

「うん！こんな風に見たの久しぶりだね」

「えーと、あれがちょうちよで、あっちがサルだろ？んでこっちのこうなってるやつが」

「にわとり！」

「そうそう！あとは…………ピグモ座ってどれだろ……………
デイル分かる？」

「ん……………くねくねしてるやつだったよーな……………
あれかな？ほら、あてんでんでんって繋がってるやつ」

「あ、ほんとだ、あった！」

彼らの知る星座が、実は父から教えられた出鱈目でたらめだと気付くのは、かなり後のことである。

二人は夜空に伸ばした手をあちこち動かしながら、顔を見合わせ笑っていた。

* * *

室内では、双子の父と母が窓からこっそり外の様子を窺っていた。また争い始めた時はすぐさま怒鳴りつけてやるうと構えていたが、勝負のつかない面白い現象にとうとう静観を決め込んだ。そして、結果これである。

「うーん。我が息子たちながら、なんっって可愛いのかしら！もう

笑ってるわ」

にやにやしながら呟く妻の横に立って、同じように様子を窺っていた夫も微笑む。

「君の子どもなんだから当然だと思っけど？」

「うふふ わ・た・し・た・ち、でしょ？」

二人も双子に負けず、体を寄せ合った。

でも、と憂えた声音で呟いたのは妻だ。

「魔術の使い方、もっとちゃんと教えなきゃだめね。間違ったら大変なことになるんだって、分かってないもの」

「そうだなあ。勝手に自分たちで次々覚えるから、ここらへんで加減を覚えさせないといけないな」

「あら、やっとパパが本気になった？放任してきたツケだからね？あの子たちの魔術に関しては、任せたわよ？」

「うん、分かった。君の頼みとあつたら断るわけにいかない」

「なあに、それ」

冗談めかした言い方に妻が笑った。

夫はじつと妻を見詰め、目を細める。

「じゃあ、契約書の代わりに、キスしてもいい？」

「だ・め」

ぴしつと額を弾かれ、夫は片目を閉じる。そして妻の指差す方向に視線をやると、二つのまん丸な瞳が興味津々というようにこちらを見ていた。

いつの間にか窓は全開になっている。

双子はじつと両親を見上げ、同時に、

「「チュー」」

と呟いた。

「こら！あんたたち！」

妻の怒声にも夫はにこつと笑い、窓の外へ腕を伸ばして双子を抱き上げる。

「お前たちもキスして欲しい？ママに選んでもらおうか？三人のう

ち、ママにキスしてもらえるのは誰か、勝負だぞ」

「「しょうぶ!」」

「こら! パパ!」

束の間、楽しそうな四つの笑い声が、あたりに木霊していた。

アツシュ、九歳と数ヶ月の、ある何気ない一日……。

〈 f i n 〉

(後書き)

読んで下さっている方、どうもありがとうございます。

ジキアの続編もそろそろ・・・と考えております。そのうちアップすると思います。

趣味の域を出ないつまない小説ですが、お楽しみ頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8590g/>

dangerous game ~ジキアside story~

2010年10月8日15時16分発行